

商品から貨幣へ

——易しいダイジェスト集(1)——

飯田 繁

- 1 社会科学は“なぜか”を追究する
- 2 経済学は何を研究課題とする学問か
——自然と社会——
- 3 商品のなかの物質と労働
——使用価値と価値、無料と有料——
- 4 “商品は役にたつから高い”のだろうか
- 5 商品とは？ 貨幣とは？ 資本とは？
- 6 労働の2重性
——異質から等質へ、質の問題から量の問題へ——
- 7 貨幣の本質（一般的等価形態）とは何か
——価値と価値形態（商品価値を表現するもの）——
- 8 “金は必ずしも貨幣ではない”が、
“貨幣は必ず金でなければならない”
——貨幣の問題と金の問題——
- 9 “物”と“かね”の社会
——人間関係の物象化、商品・貨幣・資本の物神性——

1 社会科学は“なぜか”を追究する

自然現象はどんなに不思議・不可解なものであろうとも、人間にとっては外から与えられたものとして受けとるほかはない。こうして何もわからないまま日常うけとるほどに、自然現象は至極あたりまえなことになってしまう。

“なぜか”，“なぜか”といくら探ってみてもわからないとなれば，“そうい

うもの”として覚えるほかはないことになる。自然現象については、“know why”から“know how”に問題視角をきりかえなければならない、と早くもガリレオ・ガリレイ(1564—1642)が教えている。こんにち自然科学ではノウ・ハウが重大な地位をしめるようになった。

絶えず新しい技術を開発していく自然科学者は別として、技術の多様化・高度化によって支えられている物質文明の中で生まれ育った現代の一般人は、たとえば開発されたテレビやコンピューターなどの操作(“どうするか”)を覚えるだけで精いっぱいだし、またそれでよいとされている。こうすれば、“なぜ”作動して目標の成果がうまく達成されるのか、などの、とことん突きつめた真髓までを知る(“know why”)必要はないのだろう。

ところが、人間の相互交流で成りたっている社会現象は、自然現象とはちがいで、たんに外から与えられるものではなく、すべて人間が自ら構築したものであって、それぞれに独自の発生根拠・成立理由をもっている。社会現象にはそれなりの法則があるが、自然法則そのものとはちがって、そこでは“なぜか”、“なぜか”の追究がとことんまで要求される。“なぜか”、“なぜか”が極点まで明らかにされなければ、問題は正しく処理できないはずだ。社会現象を研究する社会科学の世界では、“know why”なしには“know how”はない。物価は“なぜ”上がるのかがわからなければ、物価を下げるには“どうするか”はつかめないはずだ。

マルクス経済学は、商品から貨幣へ、貨幣から資本への展開を資本主義経済分析・解明の理論的基盤としている。それらの理論的展開のなかで自然・物質は最初から最後までつきまとって登場し、人間社会関係の物的支えともなり、表現形態の基礎ともなっている。自然・物質なしには人間は生きられないのと同様に、自然・物質なしには人間労働・社会関係を追究する経済学もない。しかし、経済学は自然科学ではない。社会科学としての経済学は、展開途上に登場する自然・物質については、実験用のメスもレトルトも顕微鏡(または望遠鏡)もいっさい使わない。自然科学の1研究対象となる商品学(商品の品質などにつ

いての化学的・物理学的・医薬学的研究)は商品論の研究課題のなかから外される。また、たとえば、げんざい人類に大きな害悪をあたえつつあると騒がれている公害、環境汚染の問題——じつは、いまはじまった問題ではない、ということは、マルクスが『資本論』第3巻のなかでテムズ川の汚染にふれているのをもみても明らか——は、たしかに自然科学と社会科学をオーバーラップする古くて新しい学際問題の深刻な1分野ともいえるものであろう。しかし、それは商品論（貨幣論→資本論への展開原点）プロパーの問題・課題だとはいきれない。

商品論のなかでの自然・物質は、まさに商品の使用価値を形成する1つの不可欠要因——もうひとつの不可欠要因は、自然・物質にたいして加工・投入される人間の労働（いわゆる具体的有用労働）——であって、人間の欲望充足とむすびつくものとして、絶対的な前提条件とされる。しかし経済学としての商品論では、自然・物質的存在はたんに前提条件とされるだけであって、商品の物質的要素にかんする自然科学的分析はぜんぜんおこなわれない。自然・物質とむすびつくそれぞれにちがう具体的有用労働の質的分析も、また自然・物質的存在にかかわる人間欲望の生理学的内容分析も。自然・物質にたいする人間の欲望が需要の要因として作用することによって、価値水準から離れる市場価格の論理においても、自然・物質そのものや、それにたいしておこる人間の欲望は、“なぜか”、“なぜか”を究明する経済学ではやはりただ与えられた前提条件として受け入れるほかはない。自然・物質は“なぜか”の追究では解明されえない秘境を包蔵するのだから。

自然そのものにかんする“なぜか”、“なぜか”の追究が最終的にはしよせん不可能で、経済学とは無縁のものであることをよく心得ていたマルクスはいう。“金（あるいは銀）は必ずしも貨幣ではないが（A）、貨幣は必ず金でなければならぬ（B）”という有名な命題のなかで、（A）の“金が必ずしも貨幣でない”のは貨幣にかんする経済学の問題だ、と。しかし、（B）の“貨幣が必ず金でなければならぬ”のは、金にかんする自然科学・地質学・鉱物学の問題だ、と。このようにはっきりと区別しているマルクスは、（B）のくたぐりを重視して

はいるものの、たんに与えられた自然現象として受けとめ、経済学の対象とはしていない。

どこまでも“なぜか”，“なぜか”を追究しなければならない社会科学としての経済学では、自然・物質によって媒介されながらも自然・物質じたいとは直接にかかわりのない人間相互の労働関係——具体的有用労働から抽象された一般的労働関係——が究明の焦点となる。生きてゆくための労働じたいをめぐる人間・社会関係こそが，“なぜか”，“なぜか”の因果関係の究明を徹底的にゆるし可能にする領域だからである。だからこそ、さらにまた、抽象的人間労働の諸現象形態（価値→価値形態→貨幣→資本）をとりまく因果関係の究明が経済学では最高使命の1つともなるわけである。

2 経済学は何を研究課題とする学問か

— 自然と社会 —

自然は人間にたいして外から与えられるもの、社会は人間が互いに寄り合ってみずからつくりだすものである。人間は自然と戦い、自然を克服し利用しながら、長い歴史の発展・変遷につれていろいろな社会関係を構成し生活する。経済とは、こうして人間が自ら構成するさまざまな社会関係のもとでの生活様式を決定する基盤である。

経済学が自然科学の1分野ではなく社会科学の1分野であるとされるわけは、経済学は人間が歴史の変遷のもとで自らつくる社会の基礎構造を体系的に追究する学問分野であるからである。しかし、このことは経済学が自然・物質と無関係であることを意味するものではけっしてない。はしおっていえば、経済学は自然と人間との関係を前提とする人間と人間との社会関係を分析・総合する理論的・現実的学問体系である。

自然と人間との関係は、いつの時代でも日常生活を支える人間の諸欲望につながる。人間の諸欲望はほとんどが自然的・物質的要素によって充足されると

いう宿命(?)のもとにある。ここでは、“なぜか、なぜかの追究”では解明されえない、したがってまた社会科学では解明されえない、自然科学的な“know how”が支配する。だからこそ、社会科学としての経済学を分析する段階では、マルクスは人間の欲望にかかわる使用価値じたいの内面分析からあっさりと手をひいたのだろう。このことは、マルクスが自然と人間との関係、したがってまた使用価値じたいを経済学のなかで無視したり、軽視したりしたことを意味するものではけっしてない。人間と人間との関係は使用価値の存在を必須条件とするむね、かれはくりかえし強調しているのだから。それにしても、近代経済学が人間の欲望充足、効用（使用価値）にたいする主観的評価の内面分析に原理論的主力を傾注するのはひとつの好対照であろう。

もともと人間が自然に働きかけるのは、人間の“衣・食・住”を本源とする展開された諸欲望をみたすためであり、欲望充足のために形成される労働生産物も人間の使用価値として存在するものである。この労働生産物が商品形態をとる特殊歴史的な私有（生産手段→生産物の私有）社会のもとでも、商品の使用価値的・物質的要因は経済学にとって絶対に必要な前提条件ではあるにせよ、それじたいとしては、社会科学の分析対象外におかれなければならないことになる。

ここまでくれば、もう明らかなように、社会科学としての経済学は、自然と人間との関係のなかに絡みあう人間と人間との関係、労働をめぐる社会関係、商品の生産に投入された抽象的人間労働関係を抽出して、その物的形態として積みあげられていく価値→貨幣→資本の複雑な諸関係を段階的・総合的に研究する課題をになっている。

たんなる労働生産物とはちがい、商品としての労働生産物はもはや単なる使用価値（使用対象、有用な自然的・物質的存在）だけのものではなく、同時にまた人間労働の社会関係を表示する価値でもある。こうして商品の使用価値と価値とは、自然と社会との“矛盾の統一”として規定されることになる。商品は、一方ではそれぞれ異質・異量の使用価値・使用対象であるからこそ交換されるの

だが、他方ではほんらい質的におなじ人間労働量をふくむ等質・等量の価値だからこそ交換される（社会関係が実現される）のである。商品価値の大きさを決定するものは、投下された人間労働量の大きさであって、商品のもつ効用の高さ（使用価値の質と量が高く大きいから）ではない。高級料亭の料理は美しいから高価なのではなく、基本的には材料・料理にかかわるすべての労働量・手数（金利・地代・建造物費用・サービス・広告費などすべてをふくめて）がたくさんかかっているから高価なのである。質と量の向上はつうれい商品に投下されるすべての労働量の増大と平行するのではあるが、高価の原因——原因（“なぜか”）の追究こそが経済学の本命なのだから——をとりちがえてはならない。

ところが、商品のなかに投入された総労働量・価値的な側面は肉眼ではとらえられない。見えるのは、そして使ってみてわかるのは、商品の物質的・使用価値的な側面だけである。相互独立の人間の労働をめぐる社会関係は、物化されて商品関係（資本主義社会では労働力も商品となる）として、しかも使用価値・物質関係としてあらわれる。こうして人間関係は物神化されて商品関係・物量関係としてあらわれる。端的にいえば、社会が自然として現象する。だから、人間と人間との労働関係・社会関係を物的外皮におおわれた現象形態・物神形態においてしかとらえない人の眼には、経済の核心は、時代を超えた単なる物と単なる物との関係、使用価値と使用価値との物量関係、物と金（かね!）との数量関係、数量と効用・評価との物質的・心理的關係のなかに存在するかのようにみえよう。そして社会科学としての経済学の研究課題が、外面にゆらぐ“価値”（効用にたいする主観的評価!）関係、あるいは“価値なき”価格関係の追究にあるかのように錯覚されることにもなる。

しかし、まぎれもなくこれらの物的外皮の深奥にひそむ、外からは見えない人間と人間との労働をとりまく社会関係の発掘・追究・総合にいどむ難行を、われわれは避けてはならない。経済学の研究課題はまさにそこにあるのだから。

3 商品のなかの物質と労働

——使用価値と価値，無料と有料——

6月はじめごろの、ある日の講義の切り出しである。

「商品[・]は物[・]もののように見えるが、[・]たんなる物（物質）ではない。商品[・]は自然と社会との矛盾の統一物である。自然とは物質・物体のことであり、社会とは労働をめぐる人間関係のことである。こうした商品[・]は私有の分業社会にだけみられる労働生産物の特有な存在形態である”。

ことしも講義がはじまってから早くもひと月半たった。さいしょの講義で商品[・]のことを以上のように要約したとき、こんなわかりにくい言葉の羅列をはじめて（？）耳にした諸君は、“これが経済学、ましてや貨幣論・金融論の講義だろうか、教室を間違えたのではなからうか”と自分あるいは教師を疑ったことだろう。しかし、今これを聞けば、“ああ、わかりきったことだ！まだやっている!! のか”と前とは打ってかわった思いをするにちがいない。

商品[・]が眼でみるような、眼だけではつかめないもの（音楽や演劇、香水やコーヒーなど）は耳や鼻や舌などでわかるような、いずれにせよわれわれのもっている5感で察知できるような簡単なもの、外面的に現われているだけのもの[・]のだというのでは、商品[・]の理解は十分ではない、ということ[・]をいま諸君が実感としてつかんでくださっただけでもありがたい」。

教室にはなんとなく朗らかな空気がただよう。

商品[・]が“たんなる物質ではない”ということ[・]は、商品[・]がその背後・底流に“人間関係を荷なっている”ということである。ところが、このように商品[・]はたんなる物（物質）ではないのに、物[・]の姿であらわれ、物としてとりあつかわれる。そこに商品[・]をめぐる最大の問題点がある。商品——さらには貨幣、資本——解明の道中にあらわれる難関として知られる“物神性”である。

商品に投入された人間労働が物質（その商品体）のなかに宿り、他の物質（交換される他の商品体）で表現されるのであればこそ、“人間労働の物質化”として人間労働と物質とは一体的に混同され、不明瞭化されることにもなる。だが、人間労働と物質とは最初から最後まではっきりと区別されなければならない。人間労働（抽象的人間労働）は価値を形成し、物質は——具体的有用労働の働きかけによって——使用価値をつくる源泉となる。ここで最も注意しなければならないことは、心身の消耗をとめない回復を要する人間の労働——商品体の形成に参加しようと、しまい（サービス）と——は人間の生活・生存を保障するための対価をもとめるが、物質（天然の動植物をふくめて）はそんな対価を求めない、ということである。

漁夫の労働は有料だが、捕獲される天然の魚類は人間にたいして何の代償もとめない。魚価はもっぱら漁獲のために費やされる直接・間接の労働量（間接とは、漁船・機具などの生産にも投入された労働量）によって決定されることになる。

谷川を流れる天然の清い水はそのまま飲めるのに無料だが、都市の水道料金はそのままでは飲めない天然の水にかけられた直接・間接の労働量にたいする代価である。ところが、水道の水に投入されたすべての労働量は完全に水のなかに消え去ってしまって、見えるのはただ清浄化された水だけだ。そして水を使う消費者の欲求も水そのものによって満たされるという考えかたのもとでは、水道に投入された労働量によって満たされているのだなどは、およそ一般には思ってもみないことだろう。だから、水飢饉や水道故障で切実に現われる“ありがたさ”の念も、水そのものにたいしてであって、投入されている労働にたいしてではなからう。水道料金も、したがって水という物質にたいする支払いとして理解されているのではなからうか。

消費者（というよりは、一般的に人）の眼中にあるのは、商品の物質的（使用価値的）側面である。そこからまた、商品の“価値”といえは、とかく物質・品質がもつ“使用価値”（あるいは“利用価値”）のことだと感ちがいされてしまうこと

にもなる。しかし、ひと皮むいて商品の分析を進めようとするならば、外面の物質的側面によって被われ、埋もれてまったく見えなくなっている内面の社会的（人間労働関係）側面をまず掘りおこし、商品の“価値”を正しくとらえ、分析・総合のプロセスを重ねていくことだ。社会科学としての経済学の研究対象・課題は、物質（使用価値の素材）と共存しながらも物質とは厳密に区別されなければならない人間労働を起点とする“対象化・物化された労働”・“労働の結晶・凝結物”・価値と、その諸形態（貨幣→資本）とのなかにあるのだから。ということは、いくら繰り返されてもよいのではないか。

4 “商品は役にたつから高い”のだろうか

たしかに商品は人間の役に立つ。もし役にたたなければ、商品ではないし、また商品にはならない。だから、人間の役にたたない、あるいは役にたたなくなった商品は、程度にもよるが、よく“商品価値がない”（じつは“使用価値・利用価値がない”というべきところ。もっとも、使用価値がなくなれば、それに宿る価値もなくなるのではあるか）とって廃棄処分されることになる。

商品がどう人間の役にたつかでその商品の値打ち（価値の通俗語）がきまる、と世間では考えられている。このように、いっばんには外形的・感覚的にとらえられる商品の物質面の効用・有用性が商品の“値打ち・価値”を決定し、そしてそれにたいして対価（貨幣）が支払われる、とみているのではなからうか。つうれい世俗的に“商品価値”とよばれている商品の効用・有用性（品質）が高ければ高いほど、それにたいする支払い金額も大きくなるのは当然のことだ、と。いわゆる近経では通用するかも知れないこうした考えかたは、マル経ではぜんぜん通用しない。

結論を先き取りして簡単にいえば、商品が高価なのはその商品の有用性が高いからではなく、その商品の有用性を高めるために直接・間接に投ぜられた必要労働量が多いからである、というのがマル経の基本的な考えかたである。も

もちろん、マル経でも商品の有用性（商品体がもつ使用価値側面）は重要視される。人間に役だつものでなければ、人間は貴重な労働を投じて（汗とあぶらを流して）こしらえたり、運んだりなどしない。役だたない出来そこないの欠陥商品や破損商品などをこしらえた直接・間接の労働はムダ遣いとなり、正規の価値を形成しない。だから、商品・価値をつくる労働はきわめて慎重・真剣におこなわれる。使用価値形成の側面で難のないよう、具体的に有用に労働することが、同時にまた他面では、抽象的人間労働として価値をつくることにもなる。自然・物質に働きかけ、使用価値・有用物をつくる労働（具体的有用労働）と、価値をつくる労働（抽象的人間労働）とは別々におこなわれる2つの労働ではなく、表裏一体をなすひとつの労働（矛盾の統一）である。しかし、人間が対価として支払うのは、その使用価値的側面そのものにたいしてではなく、それを取得するために投じられた労働量（抽象的人間労働量の結晶こそが価値量）にたいしてである、と主張されていることがらの正しい認識がこのさいもっとも大事である。

このことを正しく学ぼううえでまずもとめられるのは、世俗的な用語として安易につかわれている商品の“値打ち”・“商品価値”を、上にみたように商品の“使用価値”，使用対象あるいは商品体として正確に把握しなおすこと、同時にまた商品の使用価値とは対立的に区別される商品の価値を“労働の結晶”として要約的に理解することである。

商品の使用価値的側面は商品の自然的・物質的側面を、そしてまた商品の価値的側面は商品の社会的・人間労働的側面をそれぞれ表示するものであることも、つづいて理解されなければならない。商品というのは、そうした“自然”と“社会”，“物質”と“人間”との、あい対立する2面，“矛盾する統一物”として存在する，特有な社会関係——生産手段が私有される自然発生的な分業社会——のもとでだけみられる労働生産物の特殊的・歴史的形態である，と総括されよう。

商品の自然的・物質的側面は人間労働が投入されるまえから存在しており，

使用価値の本源をなすものであって、人間にたいしては最初から与えられたものである。だから、人間労働を抜きにした商品の自然的・物質的側面はほんらい何の対価をも必要としない。これとは反対に、人間労働が必要なものとして商品に投入されなければならないかぎり、人間の生命・生存を保障する対価が、投入された労働にたいして必要となる。1つの商品に投入された人間労働の結晶（価値）を私有する人は、商品の交換をとおして他の商品に投入された等量の人間労働の結晶（価値）を“対価”としてもとめるし、またもとめなければならない。結論を先きどりしていえば、商品の使用価値にたいしてではなく、商品の価値にたいして貨幣がわたされる。貨幣は商品の価値（使用価値ではなく）をいいあらわすものとして、また商品の価値を実現するものとして登場する。つまり、商品の価格といわれるものはほんらい商品の価値の貨幣形態であって、使用価値のそれではない。使用価値の貨幣形態などというものはないのだ（価値形態は価値の形態であって、使用価値の形態ではない。使用価値は形態化されるまでもなく、もともと物的形態そのものだ）から。

人間の生命・生存にとって決定的な自然の代表物である空気や日光がなんの対価をも必要としないのは、それらがふんだんにあるからではなく、ほんらい人間労働をまったく必要としないからである。だから、労働生産物ではないそれらは商品にもならない。空気や日光は、最高絶大・無上の使用価値をもちながらも、無価値（ゼロ価値）である。

対価がわたされるのは、商品の価値を形成している労働（抽象的人間労働）にたいしてであって、商品の使用価値を形成している自然・物質にたいしてではない、といまここでいくら強調しても、「なるほど、そうか！」とかんたんに理解・納得してもらえないかもしれない。というのは、最終的に完成された商品を手にする消費者にとって関心の的となるものは、やはりなんといっても、ほかならぬ自己の欲望をみたく商品の品質（使用価値）・結果であって、それをここまで築きあげてきた要因・原因としての投入労働量ではないだろうからである。

品質にたいしては対価をわたしても、労働にたいしてはわたしたくない(じっさいには、商品価格のなかに含まれている労賃部分を最終消費者はいやでも支払わされているのだが)、という気持をさえ消費者はもっている。それにまた、品質は感覚的に気持よく把握されえても、投入された直接・間接の労働量は感知されえない。こうして“対価”の支払いはなんとしても労働にたいしてではなく、欲望を満足させる品質・効用にたいしてなされるのだ、と商品の物質的な“外面”だけに眼をうばわれる人たちはがんばることだろう。そこがまた生産者・商人の眼のつけどころでもある。欲望に燃える消費者に高価をおしつける供給制限や、いわゆる“非価格競争”に出陣する構えともなる。

しかし考えてみると、それも無理からぬことだ。というのは、商品の背景・底流にひそむ“内面”の人間・社会関係が物質的に被いかくされていて、外面的にはまったく見えなくなっているのだから。そのことを特別に重視しているマルクスは、商品に——したがってまた、商品の展開・転化形態である貨幣に、さらには貨幣の転化形態である資本に——固有な特性であるいわゆる物神性についてくりかえし強調している。そしてこの物神論はマルクス経済学固有の論理となった。

5 商品とは？ 貨幣とは？ 資本とは？

“百聞は一見に如かず”という諺がある。いろいろと話を耳で聞くより、一度でも自分の眼で現物を確かめる方がそのものの正体をつかむうえですぐれている、とされている。また“群盲象を撫ず”ともいわれる。やはり、眼で現物を見るに越したことはないということか。

ところが、商品や貨幣や資本はたんに眼でみただけでわかるような代物ではない。たしかに商店にいっぱい飾られた“品物”(“もの”)が商品で、その“品物”を手に入れるために買い手が差しだす“かね”が貨幣、そしてその商店の経営者が予め投じている“かね”が資本であることは、まさに“一见”のとおりで

ある。しかし、こうした一見でわかるのは、それぞれの外形・現物の姿だけである。それに外形・現物の姿はおなじでも、消費者にとって商品・貨幣であるものが、資本主義社会では資本家にとっての資本のそれぞれの形態（商品資本・貨幣資本・利子つき資本）である。おなじく見える“かね”が、一方では貨幣であり、他方では資本である。商品や貨幣や資本にまつわることは、外形・現物をいくら見つめてもわからない。商品はなぜ売られるのか、貨幣はなぜ商品を買うことができるのか、商店の経営者はなぜ予め資本を投下するのか、投下して何がえられるのか、どういう仕組みでえられるのか、は一見どころか、百見してもわからない。ここでは“百見は一聞に如かず”ともいえよう。

いきなりこんなことをいっておどかさつもりはないが、商品も貨幣も資本も変遷する長い歴史（特定の、つまり私有制度の人間社会関係）のなかで順次にあらわれた産物であって、表題のはじめに立つ商品がなくなれば、つづく貨幣もなくなり、貨幣がなくなれば、表題のさいごにあらわれる資本も消える。そうなったら、さあ大変！ 人間は生存できなくなるのではないかという、さにあらず、生産力が高ければ“もの”はいっぱいある！ ただそれらの“もの”が商品ではない、商品という形態をとらないだけのことだ。

おなじテレビでも私有制度（土地・要具など基本的な生産手段の——したがってまた、それらをつかって出来る労働生産物の——私有制度）の分業社会では商品として売られるが、私有制度のない分業社会では商品として売られるのではなく、“たんなる物”としてそれを求める人々の手に渡される。眼でみたテレビにはなんの違いもないのに、一方では“商品”とよばれ、他方では“商品”とはよばれないで、“たんなる物”となる。だから、テレビを“商品”として知るためには、テレビの外観を“見る”だけでなく、それが生産される社会関係の特殊性を“聞き”知らなければならぬことになる。

私有制度のない原始時代の共同社会や未来の共同社会では、それぞれの民度・生産力のちがいもあるので、それらをかんとんに比べてみるわけにはいかないが、しかし共通な点はどちらの社会にも商品がないということだ。“描か

れた餅” (?) としてのひとつの“未来社会”を想定するならば、最高に発達した生産力・経済力のもとでみられるありとあらゆる有用で立派な美しい“もの”が何ひとつ“商品”としてではなく、“たんなる物”として民衆のあつまるところには山とつまれる。それらをつくり、そこまで運び整備するのに直接・間接はたらいた人々は（また、やむをえず働けない人々、たとえば病人・老人・子供なども）それらを必要なだけ入手できる。貨幣はいらない。“貨幣はいらない”というよりは、“貨幣はない”というべきだろう。商品がなければ、貨幣もない。商品あつての貨幣なのだから。貨幣は、もともと商品社会で人間が個別・独立的に働いたことにたいする物的証拠にほかならないので、労働時間が直接社会的に表示される共同社会では、労働時間を物的・間接的に表示する、つまり物の姿であらわす貨幣は無用の存在となる。

労働の生産物が私有される分業社会では、相互交換されることによって商品の形態をとり、生産物に投入された労働量・労働時間（汗とあぶら）の結晶は商品の価値→価値形態（やがて貨幣）として物的に表現・表示されることになる。労働生産物が商品になったので、商品から貨幣（増殖しない、もとへ帰らない価値）が生まれ、貨幣が生まれたので、貨幣から資本（増殖してもとへ帰る価値）が生まれる、というのが私有・分業社会のいわば避けられない・必然的な経済事象なのである。

ところが、労働生産物が商品の形態をとらない共同社会では、人間労働は商品価値→価値形態としてあらわれることもなく、したがって商品価値を物的に表現し実現する貨幣も成立・存在しないのだから、“貨幣から資本への転化”もみられるはずがない。

働きさえすれば生きられる、裏をかえしていえば、働かなければ生きられない、ということは人間の営むどの社会でもいちおうは成立する命題である。ただ、あらわれる実体の姿・形がおなじにみえても、その実体をつくる社会構造のなかをえぐらなければ実体の内容はつかめない。私有の商品経済社会では、個別・独立的に人目をさけてでもおこなわれうる自由な労働時間の成果が物の

姿で商品となり、貨幣（さらには資本）となることを通して、労働をめぐる人間関係は直接的にではなく、労働が投入されている私有物間の物的関係によって間接的にあらわれる。商品は物としてみられる物質・自然的要因（使用価値）であるだけではなく、同時にまた人間・社会的要因（抽象的人間労働の結晶である価値）でもある。その社会的要因が物質的におおわれているところから、人と人との社会関係が物と物との交換関係としてあらわれる。そこで、商品・貨幣・資本をめぐる人と人との社会関係をたんに物と物との数量関係としてみようとする外面だけにとらわれた考えかた（たとえば、貨幣数量説）が生ずることにもなる。

これにたいして、共同社会では人間共存に欠くことのできない人間労働は直接社会的にあらわれ、使用価値はたんなる使用価値・物として——人間労働の産物ではあっても、人間労働の結晶である価値を宿す物質・使用価値としてではなく——人間によって直接に配分され・摂取される。労働生産物がそこではたんなる使用価値にすぎないのは、それが人間労働をふくみ・あらわす私有物として相互交換されるものではないからである。つまり、そこでは労働は価値に凝結するまでもなく、直接社会的に表示されるのであるいじょう、使用価値は宿る価値の担い手・“社会を表示する物”でもある必要はないわけだ。いいかえれば、ここでは、物は社会関係をふくみ表現・表示するものとしてではなく、たんなる物として、また人間労働の社会関係も単純・卒直にあらわれるものとして、それぞれ見たままのものとなる。なお、ついでながらひとこと。ここに登場した共同社会は商品（→貨幣→資本）社会と対照的に描かれたひとつの完成図であって、世界のどこの国にも実現されていない。

商品とは？ 貨幣とは？ 資本とは？ の問いには、くりかえしのべたように、これらをたんにそれぞれの外形を現実にしかりと見るだけでは、正しく答えることはできない。これらの問いに正しく答えることができるためには、それぞれの本質・運動規定を間違いなく把握しなければならないが、それにはまず、肉眼では見えないそれぞれの概念規定の深奥・背後にひそむ歴史的に特

殊な社会関係（私有の分業社会関係）を解明しなければならない。

6 労働の2重性

——異質から等質へ、
質の問題から量の問題へ——

商品は労働の生産物でなければならない。もっとも労働の生産物ならなんでも商品かといえば、そうではない。共同社会（生産手段の私有→労働生産物の私有がない社会）の労働生産物はほんらい私有物・商品として人々のあいだで交換されたり、売買されたりはしない。

生産手段→労働生産物が私有される社会ではじめて労働の生産物は商品となる。ということは、商品の研究が起点となる経済学（商品→貨幣→資本の経済学）を正しく理解するうえでさいしょから決定的に大事なことがらであった。その上にたってもっと正確に言えば、私有の分業社会でも見られるたがいに交換されない労働生産物、たとえば自給自足・寄贈用のものや強制徴収されるものは商品にはならない。だから、労働生産物は必ずしも商品ではないが、商品は必ず労働生産物でなければならない。私有されるからこそたがいに交換されることにもなる有用な労働生産物が商品なのである。重ねていえば、商品は、人間にとって有用でなければならないが、たんに有用物であるというだけではなく、労働の加わった有用物でなければならない。各人が享受する日光、空気や天然の水がどんなに有用なものであろうとも商品にならないのは、それらが人間の労働をぜんぜん必要としない存在物だからである。商品は必ず有用物でなければならないが、有用物は必ずしも商品ではない。つまり、商品は労働によってつくられた私有の、しかも他人のための（交換をとおして他人の手にはいる）有用物である。

このように、商品が労働の生産物でなければならないということは、商品が労働を抜きにしては論じられないということである。とはいっても、労働だけ

では商品は生まれない。“母なる自然・土地と父なる労働との合作”が商品の肉体（商品体・使用価値・素材的富）である、とマルクスはウィリアム・ペティを引用しながら、まず商品のなかの自然・物質と労働との関係を説いている。しかし、それだけでは労働の問題は片づかない。商品に投入される労働にかんする問題の焦点は、その労働のとらえ方である。

商品に投入されている労働は、結論的にいえば、2つの側面をもっている。商品じたいがもつ2つの側面、すなわち、① 有用物・使用価値、② 相互に交換される私有物、の2つの側面——総括すると、他人のための使用価値、社会的使用価値——を反映して。こうして商品に投入される労働は、① 自然・物質・使用価値と結びつく有用な具体的労働の側面と、② 交換され、社会的に認識される人間労働の側面との2つをもつことになる。①の側面は商品の使用価値をつくる労働であるとして、また②の側面は商品の価値をつくる労働であるとしてそれぞれとらえ、自然と社会との別世界にかかわる“矛盾の統一物”である1つの労働のもつ2側面を“労働の2重性”（Doppelcharakter der Arbeit.あるいは“労働の2面性”〔Zwieschlächtige Natur der Arbeit〕）と名づけて、最初に科学的解明のメスをふるったのが、“自称している”ようにマルクスであった。マルクスが、労働価値説の始祖といわれるアダム・スミスやそれを追うデヴィッド・リカードを追いぬいて、科学的労働価値説を確立できた最大の基礎は、まさにこの“労働の2重性”の科学的分析にあったといえよう。こうして“労働の2重性”の解明が、『資本論』を貫く理論的体系の構築を可能にしたのであった。

商品体である商品の使用価値側面は、うえにみたように、その商品体に固有な自然・物質的要素と労働との合成物である。商品体に固有な自然・物質的要素の質的な違いに応じて、投下される労働の仕方・様式も千差万別となる。商品の使用価値をつくる労働は、質的にそれぞれちがう具体的有用労働であるといわれるわけである。

私有制度の社会的分業のもとで生きるためには、人々は自己の労働生産物を

それぞれ使用価値のちがう商品種類として互いに交換しなければならない。使用価値を生産する具体的有用労働はそれぞれの自然・物質的要素のちがいにおうじてあい異なるとしても、ただお互いにちがうというだけでは交換をくりかえしつづけていくことはできない。交換のうえで、互いに交換する人々によって納得される合理性が存在しなければならない。それは、自己の生産する商品と交換相手方の生産する商品とがどんなに使用価値のうえでは異なっているとしても、それらの商品を生産するのに直接・間接必要な労働量（やがて社会的に必要な平均労働時間・平均労働量として確立されるようになるところの）はほんらい相等しくなければならないということである。

相等しいとされる労働の結晶が、使用価値とはきびしく区別されなければならない対立的概念としての価値である。商品は、使用価値では互いにちがうからこそ、そしてまた価値では相等しいからこそ交換される。そこで問題は、1つの商品に投入され、含まれている労働が、使用価値を生産するうえでは、交換される他の商品の使用価値を生産する労働とは質的にぜんぜんちがうものなのに、その商品の価値を生産する労働としては交換される他の商品の労働とまったく同じもの（共通するもの）とされる、という点である。交換される2つの商品のそれぞれに投入された労働が、使用価値を生産する労働としては互いに異質なものなのに、なぜ価値を生産する労働としては互いに区別されない等質なものなのか。

マルクスは、発達した商品交換がおこなわれる私有制度の分業社会を奴隷・封建制度から脱却・解放された民主社会として考察した。そして人間はすべて自由・平等であるという大前提のうえに立って、商品を生産する人間の労働は無差別・等質である、としている。商品に投入され・含まれている労働は、使用価値をつくる方法・様式のうえでは質的・具体的にどんなにちがっていても、人間の労働（いまさらいうまでもないことだが、畜力〔水力・風力・火力などはもちろんのこと〕の自然的要素とは区別される。だから、“労働”とはいちいち“人間の労働”とことわるまでもなく、人間の労働である）としてはなんの違いもない。労働

の内容はしよせん「人間の頭脳、筋肉、神経、手などの生産的支出」として均等化される。異質の等質化によって、数量計算（計量）が可能となり、等質のうえでの量的差異が評価・比較の対象となる。質の問題は量の問題へ展開する。たとえば、複雑労働の問題は倍加された単純労働の問題へ、そしてまた、使用価値と使用価値との異質的な直接交換の問題は、等質の価値形態（貨幣）を媒体とする等質の数量的な間接交換の問題へ。

価値をつくる労働は、マルクスによって抽象的・一般的・人間的・労働として規定された。人間労働の抽象性・一般性は、使用価値に含まれている自然・物質的要素とそれに注がれた人間労働の具体性・有用性をすっかり捨象することによって抽出される。こうした捨象によって最後にのこるのは、人間労働いっばんに共通するもの（共通物）、同一物、第三者、労働だけの生産物・結晶（価値）である。これを窮極的にとりだすのには、頭脳の働きによる“抽象力”の外にはなんの化学的装置・レトルトも必要としない。

商品を生産する労働の2重性（使用価値をつくる具体的有用労働と、価値をつくる抽象的・一般的・人間労働）の解明によって、使用価値と価値との関係、そしてその周辺が明確になる。商品の貨幣への（異質の等質への）展開、貨幣の資本への転化（等質の量的増大）の論理的・現実的基礎があたえられる。くだいていえば、労働の2重性は商品のなかに使用価値と価値との矛盾の統一物（共同社会では見られないもの）として内包され、やがてそれは外的な対立（商品と貨幣との対立）に展開され、さらにこれをとおして等質物（一般的等価形態・貨幣）の量的増大（資本）運動へとかりたてられることになる。使用価値（異質）を交換するのが目的であった段階（単純商品流通様式）から、価値（等質）を増殖するのが目的となる段階（資本主義的商品流通方式）へ、と、異質の等質化なしには、量的拡大への展開は存立しえないのだからである。

7 貨幣の本質（一般的等価形態）とは何か

—— 価値と価値形態（商品価値を表現するもの） ——

貨幣はいろいろな商品のなかから“最適なもの”として長い歴史をへて最終的に選び出された特定の1商品である。ということは、貨幣がもともと商品社会のなかの1つの商品であったということ、いいかえると、商品が存在する社会でなければ、貨幣も、また貨幣の転化形態である資本も、存立できないことを意味する。だから、生産手段の私有→労働生産物の私有がない、したがって労働生産物が商品の形態をとらない共同社会には貨幣もなければ、資本もない。貨幣がもともとそれじたい使用価値と価値との“矛盾の統一物”＝商品であるということが、貨幣の本質をとらえるうえでの主要ポイントの1つである。

ところで、まず注意しなければならないのは、いろいろな商品のなかから最終的に選ばれた“最適なもの”とは何か、ということだ。商品と商品との交換を媒介する手段として人類の慣習や知恵によって生みだされたものを“最適なもの”としてとらえようとするひとつの構想が、たとえばアダム・スミスなどによって示されている。だが、そうした構想にもとづく貨幣の本質や貨幣の第1機能にみられる交換手段論は、およそマルクスの貨幣本質論や貨幣第1機能論とはまったく縁遠い。マルクスは“最適なもの”を商品の価値表現＝価値形態のなかでとらえた。こうしてマルクスにおいては、貨幣の本質は一般的等価形態として、したがってまた貨幣の第1機能は価値尺度として規定されている。

労働生産物が私有される分業社会では、労働生産物は独立の生産者によって私有される商品として互いに交換されなければならない。人々が構成する分業社会のなかで、各自が連帯しながらもおのおの独立して生きる道は、それぞれ得意の業務に専従してつくりだす商品をおのおのが自由意思でもとめる他人の

異種商品と交換して生活を豊かにし、向上させることのほかにはない。商品の交換は、一面ではそれぞれの商品の使用価値がちがうからこそ、そしてまた他面では、それぞれの商品の価値があい等しいからこそ可能となる。ところが、商品の直接的交換が困難であるとされるわけは、これらの対立する両面が同一場所・同一時点で成立しなければならないことにある。

米を机と交換しようとおもう人が、同一場所・同一時点（朝市など）でたまたま机を米と交換しようとする人に出会うことのむずかしさがそのひとつ。それに加わるもうひとつの困難は、両者のあいだのあい等しい価値的側面の合意である。たとえ、相互の欲求をみだす使用価値的側面では交換可能となっても、労働量・労働時間にかかわる価値的側面では交換不可能におわって、その日も・また次ぎの日もそれぞれの商品は市場から再び引きあげられて家路を辿ることになる。

そこに現われるのが貨幣商品（原始的形態では家畜など）だ！ 貨幣は商品交換をとりもつ“第3の商品”＝“交換媒介物・交換手段”だ!! などと早合点してはいけない。それではかんたんにはさきほどのアダム・スミス説へかえることになる。

たしかにマルクスも貨幣を“第3の商品”とみている。しかし、その“第3の商品”は、マルクスのばあいには“交換媒介物・交換手段”ではなく、他のすべての商品の価値を自分の肉体で表現するものである。もし商品の直接的交換のなから、互いにちがう使用価値間の交換出合いの困難さを取りのぞくことができるならば、のこる価値間の合意は質の問題から切りはなされた量だけの問題としてそれほどむずかしくはないだろう。商品の直接的交換の困難さは、両側面の（質と量の）同一場所・同一時点での交換成立のなかにあるのだから。商品の直接的交換のなから、異質・使用価値間の交換出合いの困難さを取りのぞくものこそが、商品価値の価値形態→一般的等価形態（貨幣）への転化である。

最終的な形態でいえば、米の生産者・所有者は机と直接に交換することをや

めて、貨幣とかえる。貨幣は米の価値だけでなく、机その他あらゆる商品の価値を表現するものとして選ばれ、それぞれの量的比較のもとであらゆる商品（使用価値と価値との統一）への直接的転換を可能にする。貨幣をもつものは、その表現する価値量におうじてあらゆる商品を手に入れることができる。貨幣があらゆる商品と直接に交換できるわけは、というよりはむしろ、貨幣がそれじたいあらゆる商品（一般商品〔allgemeine Ware〕）でもあるわけは、貨幣が“最適な交換手段”として選ばれたからではない。貨幣は、貨幣以外のあらゆる商品の価値をじぶんの肉体で一般的・統一的に表現し、あらゆる商品の価値と同質の価値を数量別に内包・保蔵している“最適なもの”として選ばれたからである。その貨幣がやがて商品交換の媒介体として流通手段機能をはたせるのも、基本的に一般的等価形態としての貨幣の本質規定と、それから生まれる貨幣の第1機能としての価値尺度機能を前提条件としてのことである。

それでは、問題の核心である貨幣の本質はどのようにして解明されるのか。あらゆる商品の価値を一般的・統一的に表現する形態（一般的等価形態）とは何か。

“初めが大事・初めが困難”という西洋風な諺が示すように、マルクスは貨幣の本質・“貨幣のナゾ”問題の突破口を、商品交換の最初に登場する“単純な、個別的な、または偶然的な価値形態”のなかにもとめた。それにしても、価値形態論は“商品→貨幣→資本”経済学を終始一貫する理論的・現実的体系のスタート・ポイントをなすものとして、そしてまたもっとも難解な問題として、マルクスじしんが『資本論』の第1版序文のなかで特筆している、読者の意欲をそそりながら。「価値形態にかんする節を除けば、難解のカドで本書は責められるスジはない」と。

明細に説かれている価値形態論のなかで、もっとも大事なポイントは、ごく大ざっぱに要約すると、つぎの4点ほどになるうか。① 交換されるイクオール関係のもとで、左辺に立つ商品Aの価値が、交換相手方の右辺に立つ商品Bの使用価値（商品体）で迂回的に表現される——“自分自身を表現する”というべきだろ

う——ということ。いいかえれば、左辺に立つ商品A（相対的価値形態）の価値は、商品Aの使用価値によっても、商品B（等価形態）の価値によっても表現されないということ。商品Aの価値は、商品Aの使用価値（商品体）のなかに宿るが、けっしてそこでは姿を見せない。価値はもともと社会関係（人間労働相互の平等関係）の固まりなのだから、それじしんの宿る使用価値ではなく、おなじ価値をもつ商品Bとの交換関係・社会関係のなかで、しかも人間の5感でとらえられる商品Bの使用価値・商品体ではじめて姿をあらわす。商品体Aのなかに宿る社会的要素（抽象的人間労働→価値）はおなじものをおなじだけふくむ違う商品体Bの自然・物質的要素（使用価値）の姿で出現する。社会（価値）は1つの自然（使用価値）に宿り、他の自然に変身する。

② 商品A・Bの交換・社会関係のなかでは、商品Bの使用価値はもはや5感にふれる自然・物質としてではなく、価値・社会の現象形態としてあらわれるといふこと、現物形態がそのまま価値の表現・存在形態となるということ（ちょうど重量関係におかれる分銅が金属物質としてではなく“重量”そのものとなるように）。

③ そのさい、商品Bの使用価値は商品Bじしんの価値を表現するのではないということ。商品Bがやがて貨幣に成長したさいにもいえることで、貨幣はけっして貨幣じしんの価値を表現するものでないことを銘記しなければならない。もし貨幣（金）が貨幣じしんの価値を表現したければ、貨幣はイクオール方式の右辺から左辺へ位置をかえて、右辺に立つ商品の使用価値で相対的に自分自身の価値を表現することになる。イクオール方式の左辺にたつ商品が自分自身の価値を（いいかえれば、左辺に立つ商品の価値が自分自身を）右辺に立つ商品の使用価値で（使用価値を材料として）表現するのだから。

④ 表現の主導性は左辺に立つ商品にあるということ。右辺に立つ商品（等価形態）は左辺に立つ商品の価値表現の材料にすぎない。左辺に立つ商品が自分自身の価値を表現するために右辺に立つ商品の使用価値（商品体）を材料として利用しているだけのことである。価値あつての価値形態、商品あつての貨幣

である。相対的価値形態のアクティブ性と等価形態のパッシブ性をめぐる本質的關係が商品のリード、貨幣のフォロー運動關係を本来的に決定することになる。逆に貨幣がリードして、商品がフォローするかのよう^にに錯覚した空理論的な現実判断や政策措置などが横行しているのだが……。

貨幣の本質をめぐる価値形態—等価形態論がもっとも簡単な商品交換・社会關係（1商品対1商品）のなかで萌芽としてとらえられていることをわれわれは改めて注視しなければならない。商品交換—価値形態の展開（1商品対多商品→多商品対1商品）とともに等価形態も進展して、特定等価形態→一般的等価形態が“最適なもの”として金に最終的に定着した段階ではじめて、最終の完成された価値形態としての貨幣形態が登場する。そうになると、発達した商品社会で通例みられるように、あらゆる商品の価値は統一的に金の物質量（金量）で表現され、感覚的に等質・異量として相互比較されうることになる。商品のなかの使用価値と価値との内在的対立は、いまや現実的な姿の使用価値としての商品と、具体的な姿の価値としての貨幣との外在的対立へ展開する。商品は価値のぬけ殻でしかない使用価値・“もの”として、貨幣は諸商品の価値をひと手に表現する金属・“かね”としてあらわれる。商品と貨幣との、それぞれのなかにひそむ人間・社会關係は、物化・物象化・物神化される。こうして商品と貨幣とが、たがいに“もの”と“かね”として交錯・交流する複雑な社会へと再発展することにもなる。

貨幣・金は他のあらゆる商品の価値を一身で表現する物質として価値の存在物（固まり）となり、他のいっさいの普通商品（gemeine Ware）への直接轉換可能性をもつ、それじたい“あらゆる商品”（“一般商品”〔allgemeine Ware〕）として外観的には商品社会に君臨するものであるかのようにみえる。しかし、じつは貨幣というものは、本質上も機能上も普通商品によって生みだされ、規定される（リードされる）ものなのだ。それはさて、貨幣の本質が原素的な“はじめ”の商品交換關係（“分析の困難”）のなかで説かれているということは、資本主義經濟構造のエレメンタル・フォームを個々の商品のなかにみるマルクスの

本源的なマイクロ分析方法によって終始一貫されていることをしめしている。

8 “金は必ずしも貨幣ではない”が、 “貨幣は必ず金でなければならない”

——貨幣の問題と金の問題——

「金と銀はほんらい貨幣である、のではないが、貨幣はほんらい金と銀である」、いいかえれば、“金・銀は必ずしも貨幣ではないが、貨幣は必ず金・銀でなければならない”というマルクスの有名な命題がある。『資本論』の第1巻第1篇第2章「交換過程」のなかで、マルクスは自著の『経済学批判』の文章を引用しながら金・銀と貨幣との関係を説いている。

はじめにひとこと。マルクスの命題に「金と銀」とあるのは、金でも銀でもよい、という意味である。マルクスがそういっているのは、19世紀半ばごろ当時にみられた貨幣としての金・銀の地位がそうであったからである。しかし、いまは事情がすこしかわってきているので、わたくしは金だけに問題をしぼることにした。

さて、マルクスのこの命題は前句と後句とに2分されるし、また2分されて解明されなければならない。こうして2分された前後両句は一見したところ、矛盾しているようであるが、けっして矛盾していない。金が貨幣であることを前句が全面的に否定しているのであるならば、前後両句はもちろん矛盾することになる。しかし、前句は金が貨幣となる（貨幣である）ことを全面的に否定しているのではなく、金が貨幣となる可能性をむしろ大いに認めている。貨幣が成立する社会では金は貨幣となるどころか、貨幣は金でなければならない、というのが後句である。

前句では、貨幣が成立する特殊社会の経済学的な分析が課題となる。だから、“金はいつの時代・どんな社会でも貨幣だ”という、貨幣の歴史的・社会的特殊性を無視した“金=貨幣”論をぶつメタリズム（金属学派）に反対して、

マルクスは意識的に“金は必ずしも貨幣ではない”という前句を放ったとも解釈される。貨幣の歴史的社會性を重視しての一言である。

これにたいして、“貨幣は必ず金でなければならない”という後句では、貨幣の歴史的社會性が説かれているのではなく、貨幣＝一般的等価形態の役割をはたす使用価値（商品価値を一般的に表示する自然的・物質的要因）に“最適なもの”として、いろいろな商品のなかから最終的には金が選ばれ、金に定着しなければならないことが強調されている。

結論を先どりしていえば、前句は貨幣の問題であり、後句は金の問題である。貨幣の問題は人間・社会の問題であり、金の問題は自然・物質の問題である。では、自然・物質の問題がなぜ・どのように人間・社会の問題と関連するのか。両問題の関連は、ひとくちでいえば、私有制度の人間・社会関係が自然・物質関係としてあらわれるという特殊な事情、つまり、間接的・迂回的・物的に表現されるという“いわゆる物神性”に由来している。貨幣は、その本質としての一般的等価形態でみられるように、他のあらゆる商品の価値（抽象的人間労働・人間社会関係の結晶）を一般的・統一的に表現する使用価値（物質）であるところから、この一般的等価形態の役割をはたす“最適な物質”として永年のあいだにいろいろな商品のなかから最終的に選ばれ、定着した労働生産物→商品が外ならぬ金であった。

金はもともと労働生産物としていつの時代、どんな社会（労働生産物が私有されて商品の形態をとろうと、とるまいと）にも見られるものなのだが、貨幣はいつの時代、どんな社会にも見られる、というようなものではない。社会制度の産物である貨幣は社会制度の変転とともに無くなっても、自然の産物である金はそのまま残る。まさに“国（社会制度）亡びて、山河（自然）あり”である。金と貨幣とのちがいはそこにある。ところが、貨幣が存立する社会、労働生産物が私有されて商品となり、一般的等価形態としての貨幣が商品世界のなかから選ばれて登場しなければならない社会では、貨幣は必ず金でなければならない。金と貨幣との本来の差異性が前句で、おなじ特殊社会関係のもとでの貨幣

と金との同一性が後句で明確にうたいあげられている。金と貨幣とは、もともと“ちがうもの”なのに、一定の社会関係のもとでは“おなじもの”になるという金と貨幣との深い“えにし”である。前句は“なぜか”を解く社会科学の問題＝貨幣の問題であり、後句は“なぜか”の窮極的追究とは無縁な自然科学の問題＝金の問題である。

まず前句から。金はなぜ“必ずしも貨幣ではない”のか。前述のくりかえしになるが、金はあらゆる時代・社会に存在する労働生産物である。これとはちがいが、貨幣は労働生産物が私有されて商品化する特殊な社会にはじめて存立する。金の超歴史性と貨幣の歴史性とのちがいが、金そのものと貨幣そのものとの本来のちがいを基礎づけている。そこで、金そのものが問題としてとりあげられるまえに、貨幣の本質を規定するものとして、商品価値から価値形態へ、さらに一般的等価形態への展開が“なぜか”の論理と現実をとおして先行的に説明されなければならなかった。こうして、金そのものの超歴史的自然性から区別される貨幣の本質である一般的等価形態の特殊歴史的社会性の中にひそむ“なぜか”が説明されたのちに問題となるのは、貨幣以外のあらゆる商品の価値を物的に表現する貨幣の自然・物質的属性（使用価値）である。一般的等価形態はどんな物質によって担当されなければならないのか。それはあくまでも本来ひとつの商品種類でなければならないが、いろいろな商品種類のなかからどんな商品種類の使用価値（商品体・物質）が一般的等価形態に“最適なもの”として選出されるのか。“最適”とされる物質の内容はどんなものなのか。

問題視角は後句へすすむ。まず、貨幣の本質としての一般的等価形態は、等質の価値（無差別・自由な抽象的人間労働の凝結物・結晶）を量的に表現できる、それじたい分割・融合がたやすく出来る等質の物質・物体（使用価値）でなければならない。そのほか、腐食・減量しない耐久・不滅性をもつ、少量に多くの労働量→価値量が含まれる軽々と持ち運びができる、などの特性が要求される。これらはやがて、貨幣の第1機能・価値尺度、第2機能・流通手段、第3機能・貨幣としての貨幣（蓄蔵貨幣・支払手段・世界貨幣）の諸機能を総括的にはた

すのに、いらい欠かせない物質的諸条件である。

一般的等価形態が商品交換の発達過程でどの商品によって受けつがれたかの、貨幣商品の発展史は、しよせんそれらの物質的諸条件をみたく商品物体の模索・変遷史であった。価値形態が貨幣形態へ、貨幣商品が貨幣へと最終展開をとげるのは、一般的等価形態がいろいろな商品のなかから“最適なもの”として最終的に選出された貴金属・金に定着することによってである。ではなぜ、一般的等価形態に“最適なもの”として金が最終的に選ばれたのか。金は一般的等価形態がもつべき物質的諸条件をそなえているからだ。ではなぜ、金はそんな物質的諸条件をそなえているのか。金はそんなすばらしい資質をほんらい持っているのだ、といってみても科学的な答えにはならない！ そこには、もはや限られた人知・人為の遠くおよばない自然の摂理・神秘が探究の前進をはばむ。

一般的等価形態としての貨幣が商品世界のなかから発生しなければならないという“貨幣発生の必然性”にかんする経済問題（前句）が解明されたあと（後句）で、はじめて登場する“金選出の必然性”の問題は、だから“なぜか”、“なぜか”をあくまでも追究し、また解き明かせるものとしての経済学の領域にはぞくさない“第2次の問題”（Das Elend der Philosophie, S. 107. [K. Marx-F. Engels Werke, Bd. 4.]）である。

なお、本論からは少しそれるが、“貨幣は必ず金でなければならない”という後句についてすこし。現代的視角に立つと、この後句はもはや現実とはそぐわない時代遅れのようにみえる。金貨は流通しない、金兌換もおこなわれない。国際収支の決済は金によらず、激動する為替変動相場制でなされる。世界貨幣・金に代わって出現した国際通貨（ポンド→ドル基軸通貨）時代から SDR 時代、主要国通貨のバスケット制時代への現代では、もはや後句ではなくむしろ“貨幣は必ずしも金ではない”といった“金廃貨”論が正論として風びしているかのようにみえる。

だが、注意しなければならないのは、貨幣の第1機能・価値尺度機能がいま

なお金でしかおこなわれていないし、またおこなわれえないという事実である。円・ドル・マルク・ポンド・フランなどがすべて金の貨幣名・価格名であるという点では、こんにちもかつての金本位制時代と基本的になんの変わりもない。ただ、それぞれの貨幣名の代表金量が、金兌換廃絶のいまは“不確定”時代にはいつているというちがいがだけである。それはちょうど、巨大化した船舶がもはや棧橋に横づけできなくなって、港の沖でイカリをおろして巨大船体を細々ながらも海底の大地につなぎとめているようなものである。金（大地）とのつながりがかつての“兌換＝棧橋の横づけ”時代から“細いイカリ時代”へと展開したのは、金の大量生産・流通・交換のムダを合理的に排除するためである。しかし、大地（金）とのつながりが細々ながらも保たれ、船舶（主要国通貨）の大きな漂流には歯止めがかかっているはずである。こうして労働生産物の商品化、商品の貨幣化（さらには貨幣の資本化）が存続するかぎり、“貨幣は必ず金でなければならない”という後句はやはり基本的に正しい。さらに後句にたいする理解を補足するものは、貨幣の代用物（流通手段機能から生まれる価値表章〔国家紙幣〕や支払手段機能から生まれる信用貨幣〔商業手形—兌換銀行券〕）が金そのものではなく、金の代用物にすぎないという論理・事実の認識である。

9 “物”と“かね”の社会

——人間関係の物象化、
商品・貨幣・資本の物神性——

商品経済→貨幣経済→資本経済の社会は“物とかねの社会”だ、と一般にいわれる。資本主義経済の原素形態である商品はたんなる“もの”ではない。“必ず金でなければならない”といわれる貨幣は——そしてまた、貨幣の転化形態である資本も——たんなる“かね”ではない。それなのに、世間ではよく商品は“物”として、また貨幣・資本は（紙幣や銀行券という代用物でも）“かね”として取りあつかわれている。それぞれ人間の独特な労働関係・社会関係を内面にふくむ商

品・貨幣・資本はたんなる物・たんなるかねではないのに、“物・かね”の姿で現われ、そのようなものでしかないように見えるからである。“物とかねの社会”といえ、連想的にさも美しい心のないギスギスした、物質にとらわれた味気ない世の中だ、というふうにさえ受けとられる。しかしじつは、社会関係の核心となるそれぞれの労働のなかに丹誠こめられた人々の美しい心も、ここでは“物”として、“かね”としてあらわれ、とりあつかわれる。

商品・貨幣・資本の深奥にひそむそれぞれの社会関係の特殊性・歴史性を探究し、把握しなければ、そしてさらにまた、それらが物的・物象的におおわれて自然・物質・物量関係の姿であられるという客観的事実を理解しなければ、外面だけにとらわれた単なる物量関係論（たとえば、貨幣数量説）に終わってしまうだろう。では、商品・貨幣・資本のなかにふくまれるそれぞれの特殊な社会関係が、なぜ物・自然の姿であられるのだろうか。商品・貨幣・資本の秘境ともいえる“物神性”をすこし覗き見しよう。

人間の労働をめぐる社会関係が物化・物神化されるのは、私有の分業社会にだけみられる。生産手段→生産物が共有される分業社会では、人間の労働をめぐる社会関係は物的媒介を経ないでそのまま直接社会的に労働時間の相互関係としてあらわれる。では、なぜ私有の分業社会では労働は物化されるのだろうか。私有の分業社会では、独立生産者たちは各自の労働時間・労働量を直接社会的に表示しない。人々が1日何時間、どこで労働したかを相互に確認させなければ、労働生産物の分配に参加できない（働けない者は別として、働ける者は働かなければならない）仕組みの分業共同社会とは本質的に私有の分業社会はちがう。もちろん、私的分業社会でもほんらい働かなければ、人々は自ら独立した生活を正當にいとむことはできないはずである。そのさい、労働のさまを他人に見せるのではなく、労働の成果を私有の労働生産物のなかに託し、商品交換をとおして実現する。各人の労働はすべて商品のなかに対象化・物化され、物的媒介を経て間接的・迂回的に社会化される。

私有の労働生産物を商品として交換するということは、一面では異質・使用

価値（その生産に投入される具体的有用労働）の交換であり、他面では等質・価値（その生産に投下される抽象的人間労働）の交換である。労働と労働との交換関係、人間と人間との社会関係は、こうして直接的にはなく、物的外皮におおわれた“使用価値と価値の統一物”である商品と商品との交換関係・社会関係としてあらわれる。商品と商品との交換関係の背後・深奥には、労働をめぐる人間・社会関係がひそんでいるのだが、それは全く存在しないかのように表面ではただ商品体・使用価値・物質の相互交換、物と物との交換関係としか見えない。つまり、労働の物化・物神化は労働生産物が私有化される社会に固有な、私有されているからこそおこるところの、現象である。労働の価値化、価値の価値形態化、商品の貨幣化、貨幣の資本化などにみられる形態化・物象化・具体化・物神化の展開の根源はまさにこの私有制度のなかにある。

私有制度のもとでの労働をめぐる人間関係の物化は、まず労働の物化・凝結化・結晶化・対象化・価値化からはじまる。商品に投げられた無差別・平等な人間相互間の労働（抽象的人間労働）関係は有形商品のなかに消えて跡形もない。眼に見えるのは労働（具体的有用労働）によって加工され、変様されている物質面だけである。だが、労働が加わっていることはまぎれもない事実である。商品に投げ入れられた抽象的人間労働はすでに過去のものとして消えていても、いまや凝結・結晶・対象化されて使用価値としての物質・物体のなかに宿り、使用価値と対立するものとしての価値となっている。とはいっても、価値はまだ眼には見えない。見えるのはただ商品の使用価値的側面・物質だけである。商品の生産に投入されている人間労働関係・社会関係の側面が商品の自然・物質のなかに宿り、商品じたいが“物”としてあらわれるところに、“商品の物神性”の核心がひそむ。

商品の価値が眼に見え、手にとれるような形（具体的姿態・形態）に転化するのは、商品が相互に交換関係・社会関係のなかにはいり、原始的なパターンでみるように、1商品の所有者がそれを手ばなして代わりに“使用価値のうえではあい異なるが、価値のうえではあい等しい”他の商品を手に入れることによ

ってであった。商品の価値は、交換される他の商品の使用価値で迂回的に・そして物的に表現される。こうして価値（人間・社会関係）は、対立する使用価値（自然・物量関係）の姿をとり、“物”としか見えない。価値の価値形態化のはしりとされる“単純な、個別的な、または偶然的な価値形態”は“貨幣の物神性”の起源・萌芽でもある。

“貨幣は必ず金でなければならない”といわれるわけは、等質・分割・融合性、耐久・不滅性、少量多価値・携行性などの、価値の本質を物質的に表現する形態＝価値形態・等価形態→一般的等価形態・貨幣がもつべき性能を、たまたま金が自然的属性として兼ね備えている（“なぜか”は知るよしもないが）からであった。だから、金が長い歴史ののち貨幣に“最適なもの”として商品世界のなかから最終的・必然的にそして定着的に選ばれたのであった。私有される労働生産物は商品として交換されなければならないからこそ、商品世界のなかから商品であった金が一般的等価形態・貨幣に“最適なもの”として選ばれたものなのに、事態は逆転されて、貨幣・金がもともとあるからこそこの商品も交換可能となるかのように見え、そしてまた貨幣が先頭を切って商品の動きをリードするかのようにならざるを得ない。たまたま貨幣に最適な資質をほんらいもって生まれた金は、大地から掘り出されるときに早くも人間労働を体化した貨幣であるかのように見える“貨幣の物神性”にもとづいて。あらゆる労働の成果は金の自然・物質姿態に転身して、その前身を消す。金が諸悪の根源となるのも、私有制度の所産・“貨幣の物神性”に起因している。商品・貨幣が存続するかぎり、金の外観的“王座”は崩れない。貨幣・金が紙製代用物（紙幣や銀行券）によって代位されるようになっても、“かね”（金）という金（きん）の別名が通用している。

商品の貨幣化によって“商品の物神性”は“貨幣の物神性”へ、さらに貨幣の資本化によって“貨幣の物神性”は“資本の物神性”へと進展する。“資本の物神性”も利子つき資本の最終段階にすすむと、利子は“梨の木になる梨の実”のように見える。利子は労働力の販売者＝賃労働者が労働力の購買者＝資

本家によって“搾取される”不払労働・剰余労働の結晶（剰余価値）の一部分なのに。そこでは、社会現象が自然現象としてあらわれる。資本は“自己増殖する価値”であり，“価値が価値を生む”，“貨幣が貨幣を生む”，“資本が資本を生む”ものように見え，そういうものとして取りあつかわれる。

商品はたんなる“物”ではないのに，たんなる“物”としてあらわれ（“商品の物神性”），貨幣や資本はたんなる“かね”ではないのに，いちようにたんなる“かね”としてあらわれる（“貨幣の物神性”・“資本の物神性”）。私有制度の複雑な人間・社会関係は，こうして単純に物化・自然化され，“なぜか”をあくまでも追究すべき社会・経済現象は，“なぜか”の追究を排除する自然現象に転化される。資本主義経済の科学的分析が阻害されがちとなるひとつの死角である。

（1978. 7. 30 稿）